

# Newsletter

## INSIDE THIS ISSUE

1. 研究発表要旨
2. シンポジウム要旨

### 【研究発表要旨】

#### A 室 1

## 大正・昭和初期の「科学」と文学

—— 海野十三「電気風呂の怪死事件」を巡って ——

筑波大学（院） 区 小勤

大正・昭和初期の新聞や雑誌を開いてみると、様々な健康法の紹介や広告が紙面を賑わしているなかに、電磁気学が応用されていることを売りとする珍妙な健康器具が目につく。海野十三（1897-1949）の探偵小説デビュー作「電気風呂の怪死事件」（『新青年』、1928）は、まさに当時現実に流行していたという入浴設備「電気風呂」をテーマにした物語である。本発表は、海野のこうした当時の先端科学である電磁気学を利用した健康器具への注目を再考したい。

「科学」にエロ・グロ・ナンセンスの要素を糺い交ぜにしたこの小説自体は「変格」とされ、純粋に謎解きの面白さを追求する「本格」探偵小説を主導する甲賀三郎からは厳しい評価を受けたが、しかし文化史的に見

れば興味深いものがある。1923年から1938年まで逋信省電務局電気試験所に務めていた海野十三が、民間で流行していた健康増進器具や療法に関心を示し、自分の創作に取り込んだのは職業柄ゆえかもしれないが、それに注目する作家は他にもいた。例えば、自然小説作家岩野泡鳴は「催眠術」をテーマにした「催眠術師」（1919）を書き、また実生活においても「オキシヘラー」という電磁気を利用している理学的健康器具を愛用していた。

本発表は、実際の「電気風呂」について書かれた新聞記事も参照しつつ、海野十三が作中に描いた電気風呂の特質と比較し、「電気風呂」と身体、そして精神の関係に注目し、海野の独自のアプローチを明らかにする。

#### A 室 2

## 「絵入自由出版社時代における井上勤の翻訳活動

—— 『白露革命外伝 自由廻征矢』をめぐって ——

筑波大学（院） 連 子心

自由党が設立した絵入自由出版社は、難解な書物の理解に十分な読解力をもたない大衆階級を啓蒙することを目的とし、明治16年7月から明治18年1月にかけて出版活動を行い、新著や翻訳を合わせて31冊を出版した。その3分の1は、徳島出身の井上勤（1850-1928）による翻訳書である。

勤は明治前期に洋学者、官僚、翻訳家として活躍したが、従来翻訳家としてしか認識されていなかった。しかし、当時の徳島における自由民権運動の状況と勤の著書『民権 国家破裂論』（1880）から、彼が単なる文芸的趣味で小説を翻訳したのではなく、小説を通して自由民権思想を広げた啓蒙家でもあることが確認できる。

本発表では、絵入自由出版社が刊行した勤の翻訳書『白露革命外伝 自由廻征矢』（1884）を取り上

げる。『自由廻征矢』は仏国ジュール・ヴェルヌ（Jules Gabriel Verne, 1828-1905）のペルー独立運動を題材とする恋愛小説 *Martin Paz*（1852）を原著とする。Ellen E. Frewer による英訳からの重訳と富田仁は『フランス小説移入考』（1981）で述べているが、根拠を示していない。よって、そのテキストを原著及び英訳と比較して検証を行う。また、絵入自由出版社の編集者・渡辺義方（1857-1926）による校閲と、同社の専属絵師・新井芳宗（1863-1941）による挿絵を分析することで、『自由廻征矢』が如何に政治小説として再構成されたのかを検討する。

以上により、明治10年代における自由民権思想をもった翻訳家、編集者、絵師らによる文学出版活動の実態を探る。

## 戦前期の建築系雑誌における海外情報受容の一断面

— 近代建築運動と唯物史観の再検討から —

東京大学（院） 吉野 良祐

大正期から昭和戦前期にかけて、『国際建築』や『新建築』をはじめとする建築系雑誌の発刊が相次ぎ、近代建築運動とも連動しながら、近代日本に固有の言説空間を形成した。こうした雑誌では、西洋の新しい建築デザインや思想が幅広く紹介されたが、一方、その受容を跡付ける既往研究の関心は、バウハウスやコルビュジエなど著名な組織・建築家に偏る傾向にあり、より俯瞰的・統合的な研究がまたれる状況にある。

本発表では、建築分野における個別的な海外情報の受容を貫く視点として「唯物史観と近代建築運動の関係」を仮説的に提示し、建築系雑誌テキストの理解において重要な指針たりうることを論じる。と

りわけ、戦前における社会主義・唯物史観の受容のピークを示す1930年代前半に学生時代を過ごした建築学者・西山卯三（1911-94）に着目し、西山が残したテキストや蔵書に検討を加えることで、建築界に浸透する社会思想・史観の様相をケーススタディ的に示す。それは、主要な建築系雑誌の位置づけや性格を明らかにするというテキスト研究の基礎的な作業であると同時に、他分野（たとえばプロレタリア文学やマルクス主義歴史学などが想定される）との関係をふまえて近代建築史を位置づけ直す試みの第一歩ともなるだろう。大きくは、比較文学比較文化研究と建築史学研究をいかに接合するか、という問いを射程におさめる議論を目指したい。

## 「ジャポニズム・フィクション」と天皇制

比較文学者 小谷野 敦

西洋ではギルバートとサリヴァンのオペレッタ『ミカド』(The Mikado, 1885)以来、多くの日本、日本人をモチーフとした演劇、オペラ、小説、映画が今日まで作られてきた。それらはミカド、サムライ、ゲイシャなどを重要な要素とし、時に日本人から見たら滑稽な曲解とともに作品中に取り入れられてきた。ここではそれらを『ジャポニズム・フィクション』と呼び、サムライ、ゲイシャなどと並んで、天皇がどのように描かれたかを考察する。

ハンガリーの劇作家レンジェル・メニヘルトが作った『颶風』(Typhoon, 1909)はかねて、黄禍論を反映した劇だと見なされてきたが、これはドイツ、フランスで上演される際翻訳者によって改変が加えられ、特にロンドン上演の版はローレンス・

アーヴィングによる翻案ともいべき改変を加えられた版で、世界的にヒットした。アーヴィング版の『颶風』は単なる黄禍論劇ではなく、愛国心というものが人を誤らせるという主題を持ったもので、数年後に帝国劇場で上演されたものである。

しかし、日英同盟の締結以後、『ミカド』は日本皇室に対して不敬だとする意見が出て、1926年に日本政府は国内での上演を禁止した。このことは、西洋におけるジャポニズム・フィクションにおいて、天皇が題材とされることに対する牽制となったか、以後ほとんど天皇に関するジャポニズム・フィクションは、ソクーロフの映画『太陽』(Солнце, 2005)まで見られなくなる。

## 「元気」が浮かび上がらせる明治二十年代の問題系

東京大学（院） 高原 智史

幕末維新时期から明治期にかけて、「元気」という語が盛んに用いられた。政治目標のため、「元気」を奮い立たせることが目指され、そのための方策が軍事行動や言論に求められた。

明治二十年代に入ると、外に向かって膨張すべきものとしてあった「元気」は、内にある根源的な働きをするものとしての性格を強める。徳富蘇峰は「国民の元気と教化の標準」（明治二十六年）で、社会にはそれぞれ原動力としての元気があるとし、西洋流の「平民的元気」を日本にも植え付けようとする。北村透谷は同年に「国民と思想」で、「国民の元気」を、容易に鼓舞できない根源的なものであり、そこから国民的思想が発せられるべきものとらえた。小崎弘道は『政教新論』（明治十九年）で

すでに、宗教こそが「国家の元気」を振作し、道徳に内面的推進力を与えるとしていた。同時期の第一高等学校でも『校友会雑誌』において、将来の国家の継続者たる青年として、「国家の元気」を担うべきことが言われた。

これらの言説はそれ自体を、国家について論じる文明論、文学論、宗教論、修養論として区分できるだろうが、共に「元気」を要素に含む点で共通する一方、それぞれの「元気」の意味内容にはズレもあり、「元気」は同化と異化、二方向に働いている。諸論稿を「元気を」論じたのではなく、「元気で」論じたものと見て、そこに新たに浮かび上がってくる思想的コンテクストを位置づけてみたい。

## 科学と感傷

——『スクリブナーズ・マガジン』における都市貧困ルポルタージュと文学的想像力——

ボストン大学（院）／東京大学（院） 尾崎 永奈

本報告では、1892年から1893年にかけてアメリカの文芸雑誌『スクリブナーズ・マガジン』（1887年創刊。以下『スクリブナー』）に掲載されたルポルタージュの特集「大都市の貧民」(The Poor in Great Cities) に焦点をあてる。この特集は、ボストン・シカゴ・ニューヨーク・ロンドン・ナポリ・パリの貧困層が抱える問題や社会改良の試みを詳述した、ジャーナリストや作家、聖職者らによる寄稿からなる。アメリカではとりわけ19世紀後半以降、多数の貧困ルポルタージュが出版されたが、従来の多くの著作のように貧困を近代都市のおぞましい暗部として扇情的に描出するのではなく、地域横断的に取り組むべき社会問題ととらえた点に、本特集の画期性があったといえよう。

異なる都市の事例を比較参照しようとしたこの試みは、拡大する都市空間に対する人々の視野や認識を広げうるものであった。しかしながら他方、ジャーナリズムが都市部の現実をいかに提示するかをめぐる疑問も投げかける。調査に基づき事実を「科学的に」洗い出し、具体的な提案に重きをおく論者がいる一方で、読み手の貧者への同情や共感を喚起することに社会改良の発展の可能性を見出す論者もいた。本報告ではとりわけアメリカの3都市についての記事を中心に、『スクリブナー』がこのような科学的客観性の追求と人間的な感情への訴求の双方を提示しつつ、都市の社会問題をめぐる言説にいかなる役割を果たしていたのかを示したい。

## プロレタリア文芸運動の衰退と1934～35年の「転向小説」論争

— 1930年代「私小説」言説の始まり —

筑波大学(院) 李 珠姫

1920年代半ばに作者の私生活を描いた小説として定義され、論争の対象となった「私小説」または「心境小説」(以下、「私小説」と合わせて称する)は、1935年前後に再び批評の俎上に載せられた。鈴木登美は『語られた自己——日本近代の私小説言説』(1996年)の中で、プロレタリア文芸運動の崩壊後、転向したプロレタリア作家たちが1934年頃に発表した小説が「私小説」の特性を帯びるものとして注目を集めた点を、この1930年代「私小説」言説の背景として挙げている。すでに1934年頃から「私小説」は、「転向小説」をめぐる批評言説の中で話題になっていたのである。ただし鈴木は、この「転向小説」の「私小説」的性格が当時どのように議論されたのかについては、考察を行っていない。

本発表では、「転向小説」の「私小説」的性格に

ついて論じた三つの評論——板垣直子「文学の新動向」(『行動』1934年9月)、中條百合子「冬を越す蕾」(『文芸』1934年12月)、中村光夫「転向作家論」(『文学界』1935年2月)を取り上げて分析する。そこで「私小説」は、西洋の近代小説が日本において独特な発展を遂げたものとして捉えられ、プロレタリア文芸運動の台頭以前に文壇の主流を占めていたものとして語られた。

本発表では、それぞれの論者が「転向小説」を「私小説」への回帰として評価する際にそこに何が含意されていたのか、また、彼らがアンドレ・ジッドやフォードル・ドストエフスキーなどの小説家の例に言及する際に何が狙いとされていたのかを、プロレタリア文芸運動の衰退という歴史的背景との関係において考察することを目的とする。

## 夏目漱石におけるエドモンド・スペンサーの受容

— 『夢十夜』の寓意像と想像力 —

台湾大学 吳 勤文

エドモンド・スペンサー(Edmund Spenser, 1552-1599)の『妖精の女王』(*The Faerie Queene*, 1590, 1596)は、イギリスロマン派及びヴィクトリア朝期の詩人に影響を与えた中世英文学の作品として知られる。漱石とスペンサーの関連性について、高宮利行「『薤露行』の系譜」(『英語青年』、1975年2月)は、テニソン(Alfred Tennyson, 1809-1892)の「シャロットの女」(*The Lady of Shalott*, 1833)が『妖精の女王』の「鏡」のモチーフを用いたのを指摘する際に、『妖精の女王』が漱石の蔵書にあるとの事実を提示した。管見の限り、高宮論以降、蔵書に関する言及以外に、漱石におけるスペンサーの受容についての論考はなかった。

本発表は、漱石の蔵書と読書ノート「Art, Religion, Intellect, Moralノ関係」「Romanticism」などの考

察を通して、『妖精の女王』に関する漱石の着眼点と創作との関連性に光を当てたい。漱石が特に着目した箇所は、キリスト教やギリシア・ローマ神話に基づいた『妖精の女王』第一巻の寓意像、及び「スペンサー連」(スペンサー詩形の模倣者)の一人である前期ロマン派のトムソン(James Thomson, 1700-1748)の『怠惰の城』(*The Castle of Indolence*, 1748)における超自然の想像力の描写である。「寓意」(アレゴリー)の手法に関する着眼点を手がかりにすれば、『夢十夜』(『東京朝日新聞』、1908)の「第一夜」「第十夜」に表現される「愛」と欲望の意味が読み解けるだろう。また、『怠惰の城』と「第七夜」の表現を対照すれば、「第七夜」の語り手の「孤独」の基底を支える世界観も見えてくるだろう。



## 再考 — 「南洋」への想像力

司会・講師：名古屋外国語大学 エリス 俊子

講 師：武蔵大学（名誉教授） 私市 保彦

金城学院大学 小松 史生子

立命館大学 須藤 直人

「南洋」は明治期より帝国日本の政治的な思惑と絡み合いながら探検記や冒険小説の舞台として登場し、外洋に向けられた想像力を誘発したが、旧ドイツ領ミクロネシアが日本の委任統治領となって以降、固有名詞としての国名と結びつかずに名指される、この海と島の領域は、文芸や文学の舞台または背景として、あるいは調査・研究の対象として、小説、探検記、紀行文、研究報告、随筆、詩歌など、ジャンルを跨いで積極的に言語化され、広く日本語の活字文化に浸透していった。同時代の言説状況への直接的な応答もあれば、それに亀裂を入れるものもあり、その現れは多様だが、1930年代に入るとその勢いはさらに増し、文芸ジャーナリズムに乗って「南洋もの」の絵物語や漫画も人気を博し、リアリティとはかけ離れた南洋表象が量産されるようになる。明治期以来の冒険小説の系譜があったことに加えて、ここに同時代日本の自己定位の欲望とコロニアルな意識/無意識が作用していたことは言うまでもない。さらに、南洋表象は敗戦後も途絶えることはなく、戦後はとりわけミステリ・ジャンルにおいて、帝国主義の記憶を逆照射するかたちで新たな発現をみる。

本シンポジウムでは、20世紀前半から戦後に至る南洋表象の諸相とその想像力の行方について考察する。明治期日本の帝国主義的な南進志向と押川春浪や矢野龍溪の冒険小説（私市保彦）、柳田國男、芥川龍之介、宮澤賢治、中島敦等の南洋への眼差しや、政岡憲三制作の戦中アニメ（須藤直人）、太平洋戦争下の南洋博物学・生物学と戦後ミステリの展開（小松史生子）などを取り上げ、大きな歴史の流れのなかで変容しつつ自己生成を繰り返す南洋表象をたどる。その多岐にわたる表象の背後に見えてくるものは何か、広義の比較文学研究の視座から、これを現在時に接続する問題として新たに問い直してみたい。

日本比較文学会東京支部ニュースレター130号

発行人：佐藤 宗子

編集委員会（編集担当）

委員長：椎名 正博

委員：鈴木 美穂 庄子 ひとみ 堀江 秀史 安元 隆子

事務局（発送担当）

事務局長：源 貴志

事務局委員：川野 礼音 小泉 泉 土田 久美子 南平 かおり

芳賀 理彦 畑中 健二 蒔田 裕美

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒162-8644

東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学 文学学術院

源 貴志研究室

TEL：03-5286-3725